

く者が、靴の先に穴があいているのを私が見て、私の靴と交換してやりました。作業に出ていく者がこのような靴であると凍傷にかかるおそれがあるからであります。ところが私はその靴をはいて収容所を回っているうち、靴の中に雪が入り私が凍傷となってしまう、今でも右足の親指に面影があります。

伐採する者と枕木を製材する者があり、貨車が入ると枕木の積み込みの使役に出されるのである。枕木を貨車に積み込む作業は厳しかった。体力は減退している中で生木の枕木を担いで積み込むときは足がぐくぐくし、大変な苦痛であったことは事実であります。恐らく健康な人でも重労働でしょう。

忘れられない強制労働

新潟県 岸野利栄

昭和十五年三月、義勇軍内原訓練所に入所、満州国勃利訓練所に転じ、昭和十八年に同訓練所を卒業しました

た。卒業と同時に同地の勤農開拓団に配属されました。

昭和二十年五月に、平陽の輜重隊に入隊、間もなく八月九日、ソ連軍の侵攻に対し掖河で全力をあげ応戦しましたが、撤退を余儀なくし、八月十三日ついに横道河子にて武装解除を受けました。

八月十五日、大東亜戦終結の日に海林に終結、新たに編成された作業大隊に編入させられました。そして徒歩で、海林からソ満国境の綏芬河を通過し、延々と行軍、約一か月近くかかりソ領グロデコーに九月中旬ごろ着きました。グロデコーにて約一か月、軍服を脱ぎ満州国服を着せ替えられていた私どもは、ほとんど野宿の状態にて、寒気が日増しに加わる中で、行く先もわからず待機させられました。

十月も中旬ごろ、グロデコーから貨車に乗り、シベリア鉄道で西進しました。幾日もかかり、凍り始めたバイカル湖を右に見ながら、私どもはイルクーツから同州中部のタイシュェットに着きました。ここで、私どもの輸送貨車はシベリア鉄道から外され、ニューベルスカヤというところに着きました。十二月初旬ごろだったと思いま

すが、シベリア大陸の真ただ中の荒野で、身にしむ寒気に包まれていました。

私ども作業大隊は、ソ連人のいた収容所跡の墓舎に初め入り、この地の収容所を転々と動きながら、一か年鉄道敷設作業をしました。私はここで、一人の同胞の死体の処理を取り扱いました。穴掘り、死体運搬、埋葬という一連の処理でした。入ソ當時のことで、精神的、肉体的の口々が全く余裕がなく、残念ながらこの同胞の姓名や埋葬場所は記憶に浮かんできません。このニューベルスカヤというところは、シベリア鉄道のタイシエツト駅を基点として数十キロメートルで、鉄道がここまで敷設されており、ここから北方は私どもの強制労働による計画になっていたようでした。

入ソ第二年目の昭和二十一年の四月ごろ、タイシエツトから約二百数十キロメートルもある奥地の収容所へ私どもの作業大隊は転出しました。私どもはこの収容所を第二二〇収容所と呼んでいたように記憶しております。

ここは、私どもの鉄道建設の最終地点のようでした。シベリア原始林を伐採して、工事用の木道をまずつく

り、これに並行して鉄道本線の線路敷、枕木、線路の工程でソ連式ノルマの建設が宮々と進められました。

十月に入り、私どもの作業隊はタイシエツトから最初の収容所であったニューベルスカヤの方向へ逆に戻り、パラチンカという地区の収容所に移動しました。この位置はタイシエツトから百キロメートルもあるところでした。このあたりには、ソ連軍の兵舎もありました。私どもの作業大隊は編成替えされ、この収容所（一一〇キロ収容所と呼ぶ）から七キロメートルほど離れた収容所（一〇三収容所と呼ぶ）に移りました。この一〇三収容所から東へ約二キロメートルには新駅ができていて、この地域の鉄道建設にも私ども日本人による大規模の強制労働力が終結させられておりました。

私どもはこの収容所に、昭和二十二年から同二十四年八月ころまでおりました。この間に、タイシエツトから北方二百数十キロメートルの地域間のバム鉄道建設が完了したように聞いております。

私どもの編成後の作業は、奥地での作業状況とほとんど同じでしたが、ここでは馬を使用した馬力での材木運

搬を主とした作業中隊員となりました。馬とともに一日のノルマの二〇〇%も時には上げた記憶もあり、いわゆるハラシヨールポーターとも呼ばれたこともありました。

しかし、この荒作業とノルマ遂行の陰には、幾多の犠牲が伴っておりました。材木の切り出しや運搬には作業中の事故が続出し、幾人もの死傷者を出しました。

昭和二十二年八月ごろ、私を含めて四人で同胞（一人でした）の死体を約二キロメートル隔たった東方の新駅近くの墓地まで運び、穴を掘り、埋葬しました。夏期だったので、シベリアの凍土は解け、シャベルで楽に作業ができました。頭部を北向きにし、土をかけ、赤松の幼木を植えておきました。このときのことも今残念ながら、この同胞の氏名は記憶に浮かんできませんでした。私はこの収容所で、私の町出身の佐藤六郎氏と再会したことは幸いでした。彼は昭和二十三年に帰国し、私は翌昭和二十四年九月十六日に舞鶴に上陸（明優丸）、復員しました。

あれから四十五年余り、老齢の身になった現在もシベ

リアの凍土に眠る痛恨きわまる同胞のことや、四年有余に及ぶシベリアでの強制労働。決して忘れることはできません。

タイセツト四二収容所

鳥取県 山本篤行

終戦はハルビン、孫家において武装解除。阿城から牡丹江集結のため貨車輸送、牡丹江弾薬庫収容。十月半ば日本帰国ということまで有がい貨車の二段装置の中で毎日を送る。

「内地」のみ頭にあるのでバイカル湖が日本海に見える。バイカル駅で日本帰還はうそであると観念した。また十月の末というのに果てしなきシベリアの山野は吹雪と変わり、輸送貨車に吹きつける雪と風は我々の前途を真っ暗闇にしてしまう。十一月三日（明治節）の朝引込線に入って駅もない山の中の白雪がいたるところに「下車」の命令下る。またその場において携帯した大豆を